

曇鸞教学の研究——僧肇の般若思想を基にした理論構造——

長 宗 博 之

【目次】

序論

一、問題提起

二、研究意義

三、研究方法

第一章 曇鸞研究における問題点の整理——僧肇と曇鸞の関係考——

第一節 先行研究の整理

第二節 曇鸞以前における僧肇思想の広がり

第一項 『魏書』『釈老志』の記述

第二項 長沙寺僧衡『十住経含注』序の記述

第三項 周頤と智琳の記述

第四項 慧達『肇論疏』序の記述

第三節 『往生論註』に見られる僧肇の般若思想の影響

第一項 曇鸞の經典観

(一) 『維摩経』と『法華経』の会通——「二乗不成仏」

と「二乗作仏」——

(二) 『涅槃経』と『維摩経』の会通——「仏性」と「如来種」——

第二項 「阿耨多羅三藐三菩提」の分釈

まとめ

第二章 僧肇の般若思想と諸問題

曇鸞教学の研究

第一節 僧肇の位置づけに関する問題

第一項 仏教的立場と見なす説

第二項 老莊的立場と見なす説

第三項 筆者の立場

第二節 僧肇の書物に関する問題

第一項 『物不遷論』の問題——思想的変遷の有無——

(一) 思想的变化を来した書物

(二) 俗諦を論じた書物

(三) 筆者の見解

第二項 『涅槃無名論』の問題——書物の真偽性——

(一) 先行研究の整理

(二) 筆者の見解

まとめ

第三章 僧肇の般若思想と二諦論の思想構造

第一節 僧肇の般若思想と二諦論

第一項 「般若」の概念

第二項 二諦論

第三項 「般若」と二諦論における主客の関係

第二節 僧肇における菩薩の修道過程

第一項 『注維摩詰経』に示される菩薩の階梯

第二項 『注維摩詰経』に示される四種の階梯

第三節 『注維摩詰經』に見る「般若」と主客の問題

第一項 「權智」について

第二項 「不二」について

まとめ

第四章 曇鸞における僧肇の般若思想受容態度——菩薩道の観点から——

第一節 曇鸞の菩薩道観

第一項 『往生論註』における菩薩の概念

第二項 「七地沈空の難」について——『論註』における「七地」と「八地」——

第二節 『往生論註』下「名義撰対章」と僧肇の般若思想

第一項 「名義撰対章」の整理——先行研究の整理——

第二項 筆者の論述立場

第三項 「智慧」の分釈に用いられる語句の差異

第四項 「名義撰対章」の再検討——僧肇の般若思想を通して——

第五項 「般若」「智慧」「慈悲」「方便」の關係考

第六項 「真実智慧無為法身」の解釈との關係

第七項 「三種の「慈悲」に關して

第八項 僧肇と曇鸞における不退の差異

第九項 僧肇における不退の位

第十項 曇鸞における不退の位

第十一项 「一切知」と「一切種智」

第十二項 曇鸞の行業論と二諦論

第十三項 『往生論註』における往生行の定義

第十四項 往生行に關する先行研究の問題点

第十五項 「五念門の中心行」

まとめ

第五章 曇鸞の行業論と二諦論

第一節 『往生論註』における往生行の定義

第二節 往生行に關する先行研究の問題点

第三項 「五念門の中心行」

(一) 止觀(作願・觀察)の行を中心とする説

(二) 称名(讚嘆)の行を中心とする説

第二項 「願生行者の主体」及び「五念門行と往生前後」の問題

(一) 二種の願生者の定義

(二) 凡夫相應の行

第三項 「十念の位置づけ」

(一) 憶念と見る説

(二) 願生心と見る説

第三節 五念門行者のはたらき

第一項 行業論と二諦論の關係——阿彌陀仏等の莊嚴——

第二項 諸仏菩薩・阿彌陀仏による用治

第三項 用治する心の定義

まとめ

第六章 五念門行者と下下品の者の關係考

第一節 善知識と五念門の關係考

第一項 「善知識」の定義

第二項 「觀經」の「善知識」觀

第三項 「八番問答」における「実相法」への集約意図

第二節 八地已上の菩薩による衆生教化

第一項 下下品の位置づけ——曇鸞の自己評價——

第二項 下下品の者へと展開されるもの

(一) 「真実功德相」の解釈

(二) 「名即法」の名号觀

(三) 「仏三業功德積」用治の再検討

(四) 「妙樂勝真心」への集約

第三節 『往生論註』下「解義分」各章の關係考

第一項 回向門の及ぶ範疇

第二項 『往生論註』下「解義分」における「智慧」等の

関係考

- (一)「智慧」の分釈と「障菩提門章」の関係
- (二)「障菩提門章」の「三遠離心」と「順菩提門章」の「三清浄心」の関係
- (三)「願事成就釈」との関係

第三項 衆生教化と二諦の論理

まとめ

結論

序論

北魏の曇鸞(四七六―五四二)は、中国浄土教の大成者であり、他力の思想を打ち出した人物として周知される。その曇鸞の思想背景に関して、種々の見解が出されてきた。特に、近年では『統高僧伝』の記述や当時の思想潮流の流入状況を背景として、龍樹(一五〇―二五〇頃)・鳩摩羅什(三三〇―四〇九)・僧肇(三七四―四一四)の中観系統、もしくは、菩提流支(?―五二七)などの訳経僧によってもたらされつつあった唯識や如来藏系統の思想からの影響があったことを重要視している。^①勿論、どれか一つの思想から曇鸞の教学が形成されたわけではなく、あらゆる思想から影響を受けていたことは間違いないだろう。

しかし、曇鸞が自身の教学を打ち立てていく上では、やはり何か一つ中心に据えた思想があったと考えなければならないだろう。筆者は、それを中観系統、鳩摩羅什の弟子であった僧肇の般若思想に

求められると考える。僧肇の般若思想が曇鸞教学の背景として見られること自体は、古くから指摘される通りであり、僧肇の般若思想を用いること自体が新たな見解であると言うことはできない。^②しかし、僧肇の般若思想についても、近年になって研究が急激に進み始めた分野であり、僧肇の般若思想や大乘菩薩道として示される救済の構造に関しては、改めて体系的に論じなければならない課題でもある。本論考では、曇鸞の主著である『無量寿経優婆塞具足論』(以下、『往生論註』)における菩薩の階梯や衆生教化の関係にも僧肇の般若思想が大きな影響を与えたことを提示し、僧肇の般若思想が単なる曇鸞の思想背景の一つであるという扱いから、曇鸞教学の中心に据えられたものであったことを論証する。

第一章 曇鸞研究における問題点の整理

―僧肇と曇鸞の関係考―

上記の通り、曇鸞の教学背景として、僧肇の般若思想を用いること自体は新しいことではない。そこで、第一章第一節では、僧肇の般若思想と曇鸞教学の関係を論じた先行研究を検討し、その特徴を整理した。その結果、「僧肇が用いた重要な概念を依用した、もしくはその影響が見られる」という指摘から、昨今では「曇鸞が自身の教学を形成する上で非常に重要な概念として位置づけることができる」という指摘に変化していることを確認した。

その後、第二節では、曇鸞が僧肇の般若思想を援用してきた背景に

ついで確認した。なぜなら、『往生論註』に僧肇の般若思想が直接影響したように見えても、僧肇の思想の伝播状況によつては、僧肇と曇鸞の思想的相承について言及できない可能性もあるからである。検討の結果、僧肇の般若思想は僧肇在世当時から広がりを見せ、特に慧遠・劉遺民との手紙のやりとりや南下する道生に『般若無知論』を持たせた等、南朝へと書物や思想の伝播を見ることが確認できた。これは、曇鸞が南朝に赴くよりもかなり早い時期のことであり、建康に程近い棲霞山（三論復興の拠点）においても、仏教の真なるあり方を提示した説として用いられたようである。

さらに第三節では、『往生論註』に僧肇の般若思想以外にも鳩摩羅什・僧肇の經典觀の援用が見られることを確認した。従来では、『維摩經』と『法華經』の会通の問題に対して、鳩摩羅什・僧肇の經典觀を基に解釈が加えられてきたが、筆者はそのような經典觀を基に『維摩經』と『涅槃經』の会通も可能であると提示した。その結果、特に第三章以降で明らかにするように、すべての者がさとりに至る可能性を有すということについて、実体的なものを想定せずとも、縁起・因縁生の観点より会通できることを指摘した。以上をもつて、曇鸞における僧肇の思想的相承を確認した次第である。

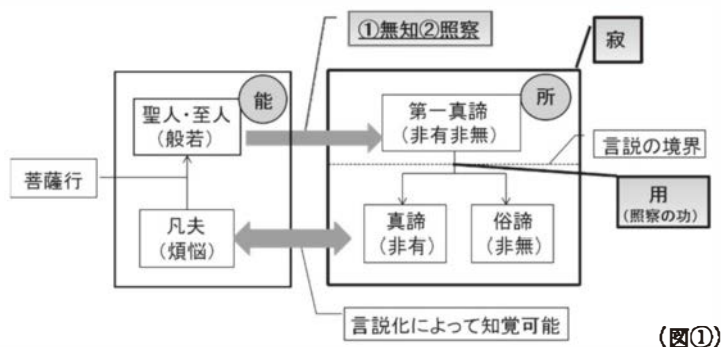
第二章 僧肇の般若思想と諸問題

続く第二章では、僧肇に対する諸問題を確認した。第一に、僧肇を如何なる人物（仏教的立場、老莊的立場）として捉えるかという問

題、そして第二に、僧肇の書物の内容や真偽性という問題である。僧肇は鳩摩羅什四大弟子の一人であり、「解空第一」と称された人物である。他方、僧肇は幼い頃より老莊の書を写す仕事を生業としており、僧肇の文章表現には老莊思想の影響が多分に見受けられる。したがって、僧肇は四大弟子の一人でありながらも、老莊的表現をもつて仏教を語っており、僧肇の基本的立場に関する見解が分かれている。それと共に、書物の内容や真偽性についても、未だ議論がなされているというのが実情である。そのため、第二章では、第一の問題（基本的立場）と第二の問題（内容・真偽性）に関する先行研究をまとめ、筆者の立場を提示した。ただし、本論考はあくまで曇鸞が如何に僧肇を捉えたかという点を問題にしており、必然的に仏教者僧肇という視点が入っているくらいがあることも事実である。しかしながら、僧肇の論述を見ていけば、仏教者としての視点をもつて「般若」や菩薩道を語る文が見受けられるため、決して間違っているのではないだろうと考える。

第三章 僧肇の般若思想と二諦論の思想構造

前章を踏まえ、僧肇の般若思想と二諦論の関係構造、そして、それに伴う衆生教化へと向かう菩薩道に関して言及したのが、第三章の内容となる。第一節では、はじめに「般若」の定義を確認し、①真理そのもの（言説を超えた境界…第一真諦）を知るはたらき（無知）と②真理を言説化するはたらき（照察）という二種の側面があるこ



(図①)

とを提示した。その際、言説化されたもの（真諦・俗諦）は、真理そのもの（第一真諦）と真理をありのままに捉える「般若」に依拠したものであるため、それ自体にも真实性が付与されることとなる。

つまり、僧肇は般若獲得者の役割として衆生教化を行う際に、この「般若」と二諦に依拠した言説をもつて、菩薩道を完成させると見ていたようである。また、『肇論』に収録された各論は、主として「般若」の追求に終始しており、菩薩の階梯や活動相（衆生教化）等について、ほとんど言及されていない。しかし、鳩摩羅什訳『維摩経』に対する僧肇の註釈書を用いることで、この点を補完した。これが第二節の内容である。その結果、①真理そのものを知り、②照らし出す性質を有す「般若」は第七地

で得られるものであることを確認した。また同時に、「般若」獲得前の第六地までとの差異を明確に示しており、「般若」の獲得は多少の修行の余地はあるが、

仏のさとりと本質的には異ならないと見ていたようである。なお、第三節において、僧肇は「般若」と「二諦」という主客の関係をもつて論じているという特徴についても触れておいた。

以上のように、『肇論』のみではなく、『注維摩詰経』僧肇註を参照し、僧肇の菩薩道観について言及したものが第三章の内容となる。これらの関係を図にすると、次の通りである（図①）。「般若」に至った者が、言説を超えた「第一真諦」を捉え（般若①）、凡夫へと言説をもつて真理を表現する（般若②）。その時、言説化された「真諦」「俗諦」は「般若」の認識対象となる「第一真諦」と性質を同じくするため、言説化された「真諦」「俗諦」も真実であるという論理が成立するのである。

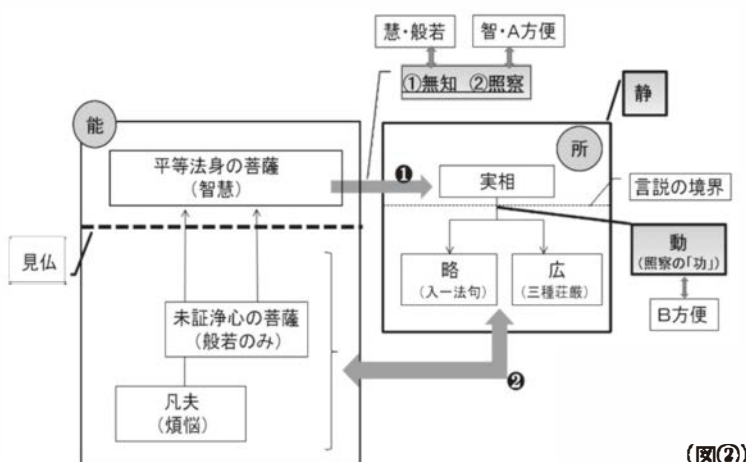
第四章 曇鸞における僧肇の般若思想受容態度

—菩薩道の観点から—

第四章は、前章で論じた僧肇の般若思想や二諦論、菩薩の階梯を基に、「般若」や「智慧」等の語句と関連する菩薩の階梯の捉え方に関して、なぜ曇鸞は四論の一つに数えられる『大智度論』の「七地沈空の難」を重要視しなければならなかったのか、この点について言及を試みたものになる。第一節では、その結論として、僧肇の不退（第七地）と二乗（第六地已下）の位置づけが、曇鸞においては第七地の問題（沈空の難）の解決とはならず、僧肇が明かした「般若」の内実や「般若」獲得の位置付けに依拠しながらも、第七地を

不退とすることは考え直す必要があったためであろうと指摘した。

続く第二節では、曇鸞が阿弥陀仏に見えることで「智慧」を修習するとした点、及びその「智慧」をもって自利利他を完成する点に、阿弥陀仏の他力のはたらきを認めたことを確認した。なお、ここで



(図②)

は「智慧」を「般若」と同義と見なす従来の研究成果に対し、近年発表された田中無量氏の見解（「智慧」に「般若」と「方便」の両義があることを重要視する説^③）を基に、「往生論註」下「名義撰对章」の説示が僧肇の「般若」の両義（①無知②照察）を踏まえた解釈となることを確認した。以上を踏まえ、第三節において、第七地で得られる「般若」だけでなく、必ず「方便」を伴う第八地における「智慧」

の獲得を目指した点に、曇鸞の特徴が窺えることを提示した。

最後に、僧肇の般若思想と二諦論を基にした曇鸞の解釈について、図で表記しておきたい。なお、「名義撰对章」では、「般若」と共に「智慧」に内包される「方便」と、「智慧」と並列させて用いる「方便」の二種が存在している。これらを区別するため、前者を心のはたらき（「A方便」）、後者を具体相たる「B方便」と定義して論を進めた。曇鸞は僧肇の「般若」の二義（①無知②照察）を「智慧」と捉え直し、それと「B方便」によって菩薩の法が成就する。その場合、「B方便」は「A方便」により照察された具体相・莊嚴功德を指し、それによって菩薩が衆生と関係を持つことが可能となるのである。これが衆生教化に際し、必ず「般若獲得者」を必要とした僧肇の思想を援用するものであり、曇鸞は二諦論を通して凡夫が真実を知る契機となる点を特に重要視したことが窺える。また、曇鸞は浄土の莊嚴等を示す二諦論に関して、「実相」や「広略」の概念を用いており、浄土の具体相が広略相入の関係にあると知ることによって菩薩の衆生教化へ繋がると見做したのである。

第五章 曇鸞の行業論と二諦論

第四章を通して検討したように、曇鸞は菩薩道の解釈にも僧肇の般若思想を援用していることが確認できた。特に、僧肇は「般若」と「行業と二諦論の関係性」によって、菩薩が衆生教化を行ずると述べており、衆生教化の際にも「六波羅蜜」を現すると見た。その

ため、「般若」によって「第一真諦」を照らし、衆生に知覚できる形で二諦を論じる時においても、「六波羅蜜」という行業をもつてすること、具体的には「般若波羅蜜」を行ずることになる。もしそうであれば、僧肇の般若思想と二諦論の構造を援用する曇鸞にも、二諦論の展開に菩薩の行業が関係することが推測できる。そこで、第五章第一節・第二節において、五念門行者の衆生教化や自利利他成就に関する先行研究を整理した。

そして、第三節では、五念門行者による衆生教化・自利利他成就に関する私見を提示した。ここでは、五念門行者の回向行はたらしきによって、下下品の者が阿弥陀仏のはたらしきに出遇えるということ、具体的には、『往生論註』上「八番問答」第六問答にある「善知識」による「実相法」の説法や「仏三業功德成就」の説示に注目した。特に、「八番問答」の「実相法」とは、相入関係にある広略の「広（三嚴二十九種莊嚴）」に該当し、広略が「実相」に包摂される形で二諦論が提示されている。しかも、曇鸞は広略の相入関係を知るはたらきとして「智慧」を提示しており、ここに五念門行者と二諦が密接な関係にあると指摘できるだろう。したがって、筆者は「八番問答」の第六問答に述べられた、「善知識」によるはたらきが五念門行者の回向行に相当すると考え、具体的に衆生教化に用いられる概念や諸仏菩薩による衆生への用治作用（「仏三業功德成就」の説示）を確認した。第五章の主眼は五念門行と二諦論の関係を明らかにすることであり、「智慧」を有す五念門行者のはたらしきによって、二

諦に基く「三嚴二十九種莊嚴」という具体相が下下品の者へと展開されることを論じた次第である。ここに真実性を付与する論理として、先の僧肇の般若思想と二諦論が援用されており、曇鸞は自身の救済に関わる回向門のはたらしきとして「実相法」を捉えていたと考える。

第六章 五念門行者と下下品の者の関係考

第五章において、『往生論註』に示される往生行として五念門行と十念を分け、五念門行が「実相」を衆生へと展開させる側面を有すことを論じた。これを踏まえ、第六章では、具体的に五念門行と十念行者の関係、「如何に五念門行者のはたらしきが下下品の者へと展開されるのか」という視点より検討した。従来では、五念門行者のはたらしきが下下品の十念往生を成立させるという指摘があるにも関わらず、いざ下下品の者の往生に関する先行研究を確認しても、基本的には阿弥陀仏の名号によって往生するという見解に終止している。したがって、下下品の者がその本願・名号に出遇うためには、回向門を行ずる菩薩のはたらしきが必須であるが、改めてこの点を論証しない限り、下下品の者へと阿弥陀仏の救いが届いていることが証明できないのではなからうかと考える。上記の問題を解決するに当たり、『往生論註』上「八番問答」に示された、五逆・十悪を犯すような下下品の者を阿弥陀仏の浄土へ向かわせる「善知識」のはたらしきを基に検討を試みた。

まず、第一節において、「善知識」の定義を確認した。その後、『往生論註』の中で、下下品の者へと五念門行者のはたらきが関係する箇所（臨終時に「善知識」が「実相法」を聞かせるという記述）に着目して検討を試みた。その結果、この「実相」という概念は曇鸞のテクニカルチームの一つであり、観音・勢至のような大菩薩（一生補処）による説示（言説を超えた「実相」を言説化し、衆生に知覚させるはたらき）であった。これは、『往生論註』に示された八地已上の菩薩による利他のはたらきとなるため、「智慧」を有す菩薩の階梯の中でも非常に高次な者でなければならぬものとなる。

続く第二節では、『往生論註』上「八番問答」以外にも、「真実功德相」や「名即法」の名号の説示によって、下下品の者に各莊嚴や阿弥陀仏の滅罪のはたらきを提示していることに着目した。このように、五念門行者から下下品の者へと振り向けられるものとは、名義相応するもの（名即法の名号や二諦に随順したもの）でなければならぬため、ここにも「智慧」を有す五念門行者と二諦の関係を基にした衆生教化の一端が確認できる。

第三節では、このような衆生教化のはたらきを五念門行者の利他行と位置づけた理由は、曇鸞が『往生論註』下「善巧攝化章」以降に回向門の説示を述べる中、「障菩提門章」「順菩提門章」「名義攝对章」「願事成就章」の各章を通じて「智慧」等のあり方を論じ、「智慧」「慈悲」「方便」等が最終的に「妙楽勝真心」へと集約される点より窺えることを指摘した。その時、曇鸞は「妙楽勝真心」の字義

を分釈し、この心の性質として、「阿弥陀仏を機縁とすること」や「二諦に随順し、衆生を済度すること」を示した。その結果、「妙楽勝真心」は阿弥陀仏に依拠した心のあり方であると位置づけ、「智慧」を有す菩薩による衆生教化へと向かうはたらきとして理解したのである。

結論

本論考では、「曇鸞教学の研究―僧肇の般若思想を基にした理論構造―」と題し、最終的に曇鸞自身が如何なる形で阿弥陀仏の救いのはたらきに預かると捉えていたのか、この点に焦点を当てて論証を試みた。それに際し、筆者は曇鸞の教学背景の一つと考えられてきた僧肇の般若思想と二諦論を基に、衆生へと真実を展開することを可能にする「智慧」、そしてそれを有す五念門行者のはたらきに着目した。特に、五念門行者の回向行・利他行と下下品の者の関係という観点から、五念門行者の存在が下下品の者に阿弥陀仏の本願力が届くことを知らせる橋渡しの役割を担ったことを論証した次第である。この作業により、下下品の者へと展開される阿弥陀仏やその浄土（三嚴二十九種莊嚴）の莊嚴に対し、二諦に順じた真実性が付与されるのである。加えて、臨終時に苦に苛まれる下下品の者に対して、阿弥陀仏の浄土に生まれたいと願う心が発せられる、または阿弥陀仏の本願力に乘託させていくはたらきを五念門行者の回向行に見出したことに、従来の親鸞教義の範疇で解釈してしまっていた

見解に対し、一つの解答を提示したこととなる。ただし、本論考は純粹な曇鸞教學を検討するに当たり、あくまで僧肇の般若思想を基に検討したため、その他の思想潮流に対する検討が十分にできていないという問題もある。その点を補い、僧肇の般若思想との影響関係を比較検討することができれば、より一層、純粹な曇鸞教學を明らかにすることが可能となる。

しかしながら、僧肇の般若思想を基に検討したことで、これまで言及されてこなかった、曇鸞における阿彌陀仏と衆生救済の間を繋ぐ論理を構築できたことは非常に大きな意義があったと考える。特に、「般若」の追求に終始したと評される僧肇の思想を菩薩道の面と二諦論の関係から考察した点、そして、「往生論註」に示された「智慧」と「実相法」の関係より、臨終時の衆生が「智慧」を有す菩薩から教化を受けられることを論じた点、これらが筆者独自の見解であるということを最後に付記しておきたい。

註

- ① 鳩摩羅什の生没年は、塚本善隆氏の説を参照した（塚本善隆「仏教史上における肇論の意義」（『肇論研究』、一九五五）。曇鸞の思想背景は、神子土恵龍氏の『弥陀身土思想の研究』（永田文昌堂、一九五〇）や石川琢道氏の『曇鸞浄土教形成論—その思想的背景—』（法藏館、二〇〇九）に詳述されるため、そちらを参照してほしい。また、曇鸞は唯識思想からの影響が大きいという相馬一意氏の指摘がある他、『大乘起信論』撰述年次に関する論考を基に、曇鸞と『大乘

起信論』の関係について指摘した内田准心氏の論考もある（相馬一意「曇鸞『往生論註』の講究」（永田文昌堂、二〇一三）、内田准心「曇鸞浄土教の研究—同時代的視野から見た実践と思想—」（龍谷大学、二〇一六、学位取得論文）二七三—二七五頁参照。

② 古くは良忠（一九九一—二八七）の『往生論註記』や現代にまで大きな影響を与えてきた香月院深助（一七四九—一八一七）等の江戸講録など、僧肇の文を挙げて『往生論註』の文を解釈する研究は枚挙に遑がない。

③ 田中無量「北朝仏教における『往生論註』の思想構造の研究」第二章（龍谷大学、二〇一四、学位取得論文）参照。

④ 『注維摩詰經』に、「肇曰、至人不現行、現行六度者、為撰六弊耳。」（『大正藏』三八・三三九頁中）とある。ここでは、本来般若獲得者の異称である「至人」が行を現することはないとしながらも、六弊（慳貪・破戒・瞋恚・懈怠・散乱・愚痴）を撰するため「六波羅蜜」を現していると述べる。